世田谷村日記

石山修武

二〇〇三年一月一日

深夜二時磯崎宅より世田谷村に戻る。

朝、母も交え皆で新年を祝う。今年は狂乱の年になりそうな予感もあり、どんな事が起きても、起こしても動じず、より一そうの狂雲に乗ってゆく積りである。

一階、つまり地上の庭の梅の木に沢山の鳥が集まるようになっている。それを二階のフロアーから眺めている。

一月二日

昨夜雪が降ったようで、世田谷村のまわりはうっすらと雪景色。昨日は完全休養だった。今日は年賀状製作といささかの原稿、そしてスケッチを始める。午後佐藤健の弔辞を用意する。明日から通常の日課に戻ろう。今日は不覚にも一日ズルズル休んでしまった。

一月三日

薄曇りの寒い日になった。十三時大学へ。修士設計のチェックをする。十五時家族と共に車で我孫子真栄寺へ。途中渋滞に巻き込まれたり、道を間違えたりで遅れ、十八時三〇分真栄寺到着。すでに読経は終りかかっていた。照道の講話をきき、あとは宴。健は遺言通り、酒百本をひつぎの廻りに並べ立て、皆に振舞った。水野、大住、宮原、六車等と飲む。結局本当の通夜になってしまい、真栄寺の地下で寝る。健の遺体の下で寝たようなものだ。少しはあったかくなったか。早稲田野球部であった六車、夜中に暴れる。グッスリ眠った。

一月四日

明けて告別式。六時頃お寺の鐘の音で眼を覚ます。九時過、真栄寺の味噌汁で朝食。随分沢山な人が集まり、十三時告別式。毎日新聞社長斉藤明、大住広人と共に弔辞を述べる。十六時頃焼場へ。イヤーな焼場だった。骨を拾い、真栄寺に戻り、初七日と精進落し。夜半、疲れて家内と世田谷に戻る。

しかし、これでようやく私の年越しとなった。

一月五日

元旦みたいな快晴である。佐藤健の葬儀も終え、一区切ついた。屋上に上る。霜柱が凄絶に立っていた。やっぱり鉄板の地盤は冷えるのであろう。正月の生ゴミをスコップで埋める。明日の仕事初めでスタッフに伝えなければならぬ事の草案を練る。今年を何とか乗り切ったら、アトは自然にやってゆけるやも知れぬ。マ、そんな事もあり得ないだろうが。月並みだが一日一日を大切に、無駄を省いて乗り切りたい。地下を、子供のレベルから引き上げなければならないのだが、どうしたら良いか。難問中の難問であるが、少し計り視えてきたような気もする。スタッフとはストレートに接しよう。クセ球投げても効用がある連中ではない。